【看護学部　看護学科】
二〇二五（令和七）年度　総合型選抜

小論文課題

次の課題文を読み、『「すべての人が豊かに過ごせる社会」を実現するために看護が貢献できること』について２０００字程度で論述しなさい。参考にした文献や資料等がある場合は、出典を明記すること。

入り口の扉を開けると、施設いっぱいに広がるクッキーの甘い香りが、体中に潜り込んでくる。玄関先にずらりと並べられた商品は、包装も可愛らしく、手に取ると思わず笑みがこぼれる。

滋賀県大津市でクッキー製造販売を行う「がんばカンパニー」は、１９８６年の設立から30年を超えても、オーガニック素材のクッキーが人気を呼び、全国から注文が絶えない。

その年商は、一時２億円にも達し、現在も１億円以上の規模を保ち続けるなど、低賃金・低収入とされる福祉サービス事業所の常識を打ち破った存在として知られている。

クッキー工場を含めた法人全体の雇用人数は１３７人。そのうち、障がい者（手帳を持っている者）は65人。採用時の優先事項は「生活の転落を防ぐこと」としており、鬱などの手帳を持たない疾患者、生活保護者、母子家庭の母親なども34人いる。1995年には障がい者とも雇用契約を結び、働く全員が最低賃金以上を実現した。がんばカンパニーの給与は６万円～24万円と全国の障がい者施設（就労継続支援事業）の平均２万１１７５円を大きく上回る。また、障害がある者同士が結婚して独立したり、アパートで一人暮らしをしたり、一家の大黒柱として家族を扶養したりと、働くことを通じて新たな人生を歩んでいる。

・・・中略・・・

内容を明快に伝える

香ばしい部屋に別れを告げると、クッキーは隣の乾燥室に運ばれ巨大扇風機の風を浴びて、一気に乾かされる。そして次に向かうのが包装室だ。がんばの商品は種類も多い分、ギフト仕様などに応じて包装作業も細かく分かれており、間違いは許されない。

「納期近いから、今日中にこの段ボール分を包んで発送するよ！」

ここでも、掛け声で自分たちを発奮させながらの作業が続く。知的障がい者と会話する際、

知らず知らずの内に、子どもに話しかけるような言葉遣いになってしまうことがある。しかし、言い回しが情緒的な事と、内容を明快に伝えることは似て非なるものだ。納期を「作ったものを偉い人に届ける日」と言い換える事は、知的障がい者に対するステレオタイプのイメージを助長する恐れさえ孕んでいる。

包装紙のお化粧を施されたクッキーは、ベルトコンベアに乗せられ、終着駅でもある製品検査室へとたどりつく。

金属探知機を通し、賞味期限などのラベル印字を入念に確認してから、丁寧に箱詰めしていく。ここでは、座っての作業が多い分、足が不自由な人など、身体障がい者が多い。足に障害を抱えながら長年勤める男性は、「最後の砦ですからね。重要な仕事です」と立ち上がって空箱を取ると、元の場所に座して黙々と詰めていく。何気ない動作だが、自身が動ける範囲で誰の手も借りずに仕事ができるよう、計算されている事が分かる。

そして、製造と同時に出るトレーなどの洗い物が、全ての部屋から絶えず運ばれてくるのが洗浄室だ。作業も大詰めになると、「手あいたよ」と他の部屋から手伝いにやってくるなど、最も出入りの激しい場所。つまりはそれだけ大切な作業という事でもある。

がんばカンパニーに限らず、どの作業所施設を見学しても感じさせられるのが、誰も彼も一切手を抜かずに勤勉という事だ。

「本当に！皆さんマジメで一生懸命なんですよね」

居合わせた健常者の職員・西村さんも、その意見に大きく賛同してくれた。

「できること」をわかること

障害がある職員は始業時間きっかりから仕事モード全開で、就業ベルのぎりぎりまで黙々と働き続ける。周囲への影響も含め、その貢献度たるや計り知れないと感じることがある。

その上、がんばに来て驚いたのは、手作業を中心としながらも、知的障がい者自身の手で機械を操作している事だった。

「障がい者に機械作業なんかムリ、と決めつける人もいるけど、時間をかけて教えてあげればなんなくできますよ。今日忙しいから頼むよ！と肩をたたいてやれば、目に見えて張り切りますしね」

「わかること」をできるのではなく、「できること」をわかる事。そうすればいずれ、できることは「わかること」となり、仕事の幅が広がって行くはずである。西村は、「そうそう」と思い出し笑いをしながらこうも話してくれた。

「見学された皆さん、決まってこう聞かれますね。“どこに障がい者がいるのですか？”“彼らは本当に障がい者なんですか？”って。その言葉を聞く度、やっぱり障がい者と健常者ってそんなに大差ないんだなと再認識させられます」

企業の立場から、業務の合理化・効率化と障がい者雇用は相反するものだと私見を述べる人も多い。しかし。適材適所という観点から見れば、そこまでの相違はないように感じる。仕事の能力や人間性は、障害とは切り離して講じるべきであり、時に決め付けにさえ繋がる。

ふと洗浄室に目を向けると、フロアの片隅で、背を向けて一再ならず黙々とトレーを拭き続ける女性がいた。その後ろ姿に、ともすれば地味な軽作業ととらえる人がいるかもしれない。しかし、知的障害を抱える彼女の仕事について、

「彼女は生地をこねたりという作業は難しくてできません。でも、容器を拭くことはできます。毎日、ずっと黙々と、容器を拭き続けてくれる、それが、この場所での彼女の仕事であり、他の誰にもできない役割です。彼女はトレーを拭く係ではありません。トレーを拭いてくれる人なんです。彼女一人欠けても、クッキー工場は回りません」

西村はそう説明すると、もう一度頷き、「人なんですよ、人」と、私情を吐露するように同じ言葉を二度続けた。

生地を絶妙な大きさで絞り出す知的障害がある男性は、「絞りは彼じゃないとできない」と誰もが認め、芸術のように一つ一つの作品を仕上げていく。包装室から製品検査室へつながるコンベアで、商品を送り出していた女性は、下半身が不自由だが、大切なパイプ役となる場所に座り、検分に目を見張らせる。彼女はここの給料で両親を扶養している。

出典：姫路まさのり『障がい者だからって、稼ぎがないと思うなよ。ソーシャルファームという希望』新潮社
二〇二〇年　七〇―七七　項